慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢百助著『杲育堂詩稿』(四)
Sub Title	The translation and notes of Koikudo (『杲育堂詩稿』) (A collection of poems written by Hyakusuke Fukuzawa (福沢百助)) (IV)
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro) 『福翁自伝』を読む会("Fukuo jiden" o yomu kai)
Publisher	三田史学会
Publication year	1983
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.2/3 (1983. 7) ,p.125(231)- 148(254)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19830700-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢百助著『杲育堂詩稿』（四）

佐藤一郎 訳注
『福翁自伝』を読む会・諸家 補注

（作品41）九月二十一日、先考忌日有感

九月二十一日、先考の忌日に感有り。

獨立西風望故園　西風に独り立ちて故園を望めば（目送斜陽→獨立西風）
白雲飛処欲消魂　白雲飛ぶ処魂消えなんとす
遙知阿母携兄弟　遙かに知りぬ阿母の兄弟を携れて（兄弟扶阿母→阿母携兄弟）
上墓焚香拭涙痕　上墓して香を焚き涙痕を拭うを

去年闔族列神前　去年闔族神前に列なり
俱薦蘋蘩泣暮天　俱に蘋蘩を薦えて暮天に泣けり
今日浪萃本願寺　今日浪華の本願寺（東西→浪萃）
空将香火禮金仙　空しく香火もて金仙を礼す（獨→空）

尊貌猶如在目前　尊貌猶お目前に在るが如し
星霜屈指已三年　星霜指を屈すれば已に三年
告神亀勉依垂統　神亀に告さん勉めて垂統に依りて
兄弟六人共與全　兄弟六人共に与に全からんことを（俱→共）

語釈　**衣**　去の字は、もと**衣**に作る。

蘋蘩　神仏にささげるさゝやかな供物。原義は浮草

浪華本願寺　大阪の北御堂と南御堂。北御堂は正式には津村別院といい、石山本願寺の直系であり、西本願寺派。南御堂は東本願寺派別院。「西本願寺、在二安土坊西一。」…東本願寺、在二其南一。堂宇構結（ママ）、較レ西少減。」（田中君安著『大阪繁昌詩』巻之中）福沢家菩提寺、中津明蓮寺は西本願寺派である。

福沢一族交遊関係

○諱、政房。号、兵左衛門。文政四年辛巳九月二十一日、卒年五十七。法諡乗蓮、葬竜王浜。（百助の父）（『全集』系図）

○一族から一人離れて大坂蔵屋敷に勤務し、父の三回忌に亡父をしのび、追悼の詩を作った。真宗系統の習慣を持ちつづけていることが注目される。

○兄弟六人。河北展生氏いう。兄弟六人とは、次の六人である。百助。藤本寿庵妻、名於国。渡辺弥市妻、名於律。茂徳号術平、中村須右衛門の養子。和号群平、東条太兵衛の養子。荒川彦兵衛妻、名於登野。

○小泉仰氏いう、「福沢自身も自家の宗教が仏教（浄土真宗）であったことから、仏教への個人的愛着をもっており、信仰はもたないとしても仏教に対して、拙者も援兵の一人なり『宗教の説』明治一四年五月～六月と断言するように

なった……明治二十二年のころになると、彼は、仏教宗派の中でも自家の宗教であった浄土真宗に目を向けるようになってきた。そのきっかけは、彼が、浄土真宗が社会的功利性において最大の利点をもっており、社会教化の手段において最も優れてもいると考えるようになったことである。(『人間と宗教〜近代日本人の宗教観〜』東洋文化出版'82年6月)

補説 百助はまた一家一族に対する愛情が深く、詩の対象として家族のだれかが取上げられている場合が多い。

○中井竹山の詩風…大坂の懐徳堂学主にして『奠陰集』八巻の著者につき松下忠氏いう、「竹山の詩集を読んで感ずることは、人間関係の作品が多いことである。人間に対する関心が深いのはその人柄が然らしめる所で、この点修飾を排して自然の真実を尚んだ竹山の詩論とも一致する。今奠陰集の詩巻巻一・巻二の中から、家庭生活に関する作品だけを拾って見ても、六十首以上に及び、このうち児女に関するもの六分の一、……」『江戸時代の詩風詩論』(明治書院昭和44年3月)

○中井竹山について百助は、上坂前に師帆足万里著『肄業餘稿』(同書には万里の師、豊後の脇愚山の文化戊辰仲春の跋文あり)により、すでに知るところがあった。百助自身の蔵書中にも『肄業餘稿』があり、現在臼杵図書館の「福沢先生遺籍」を構成している。その巻一に、「竹山先生以為、峡中記行、徂徠集第一、可謂知言、但其中訛謬亦自不少也」と見えている。

○脇 愚山はまた脇屋愚山、別号は蘭室、名は長之、通称儀一郎、字は子善。文化年没。中津藩儒野本謙卿・倉成竜渚と交遊す。また「先山先生答問書」がある。詳細は久多羅木儀一郎編『脇蘭室全集』(編者刊昭和55年増補改訂版双林社)参照。

○野本雪巌・字謙卿中津藩儒(『漢文学者総覧』)『奥平藩臣略譜集録』に「文政六年江戸に赴き侍講に任ぜらる」とある。倉成竜渚は前出。

（作品42）　瓶中菊

瓶中の菊

霜寒客舎暗香浮　　霜寒うして客舎暗香浮び
床上獨看瓶裏秋　　床上独り看る瓶裏（へいり）の秋（窓下間→床上独）
數種名花故園菊　　数種の名花故園の菊
東籬猶似去年不　　東籬猶（な）お去年に似たるや不（いな）や

語釈　暗香　やみのなかにただよう花の香り。宋の林和靖の「疎影横斜水清浅、暗香浮動月黄昏」を踏えるか。

瓶裏の秋　瓶に菊を活けてあるのであろう。「窓下間」から「床上独」の改作も成功しており、この一句もつとも秀逸。蔵屋敷での一人暮しの感慨がこめられている。

短評　東籬　陶淵明「飲酒」其五の第五句「采菊東籬下」望郷の詩人百助は目の前の瓶中の菊を通して、わが家の菊、さらには家族や友人をしのぶのである。既出田園雑興に、「籬菊方開九月天」とあり。これは中津の自宅の庭の実景である。

現代語釈

花の香たゆたう宿は寒く
ひとり寝の瓶裏の秋
主なきわが家の菊　去年（こぞ）と
ひとしく咲くか東（まがき）の籬に

（作品43）　謝吉田生惠菊花

吉田生の菊花を恵まるるを謝す

田生愛菊不愁貧　田生菊を愛して貧を愁えず（吉→田）
贈我枝〻別様新　我れに贈れる枝々別様に新たなり
莫怪相看賞心切　怪む莫れ相看て賞心の切なるを
東籬初得見花神　東籬初めて花神を見るを得たり

語釈　田生　田は中国の姓にあり、吉生より田生の方が可。
別様　格別なるさま。
賞心　たたえる気持。
花神　花の神　花を司る神。

短評

福沢一族交遊関係　吉田生より菊を贈られ、故郷の東籬に咲く菊花をしのぶ。もし奥平藩士だとすれば、『奥平藩臣略譜集録』には吉田姓は一軒きりなく、「吉田耕作家　小役人　吉岡流柔術師範」とあるが、この家との関係如何。

（作品44）　癸未十一月、聞増田生入学于進脩館、賦梅花以寄。

癸未十一月、増田生の進脩館に入学せるを聞き、梅花を賦して以て寄す。

軟紫柔紅摧隕霜　軟紫柔紅隕霜を摧く
高操獨欲放清香　高操独り清香を放たんと欲す
江南曽許花魁號　江南曽て許せり花魁の号
莫使瓊瑤後衆芳　瓊瑤をして衆芳に後れ使むること莫れ

語釈　進脩館前出、中津藩藩学。現在、生田家老屋敷跡の学校の廊下に「進脩館」の偏額が残っている。
隕霜　霜のふること、「隕レ霜殺レ菽」（春秋）

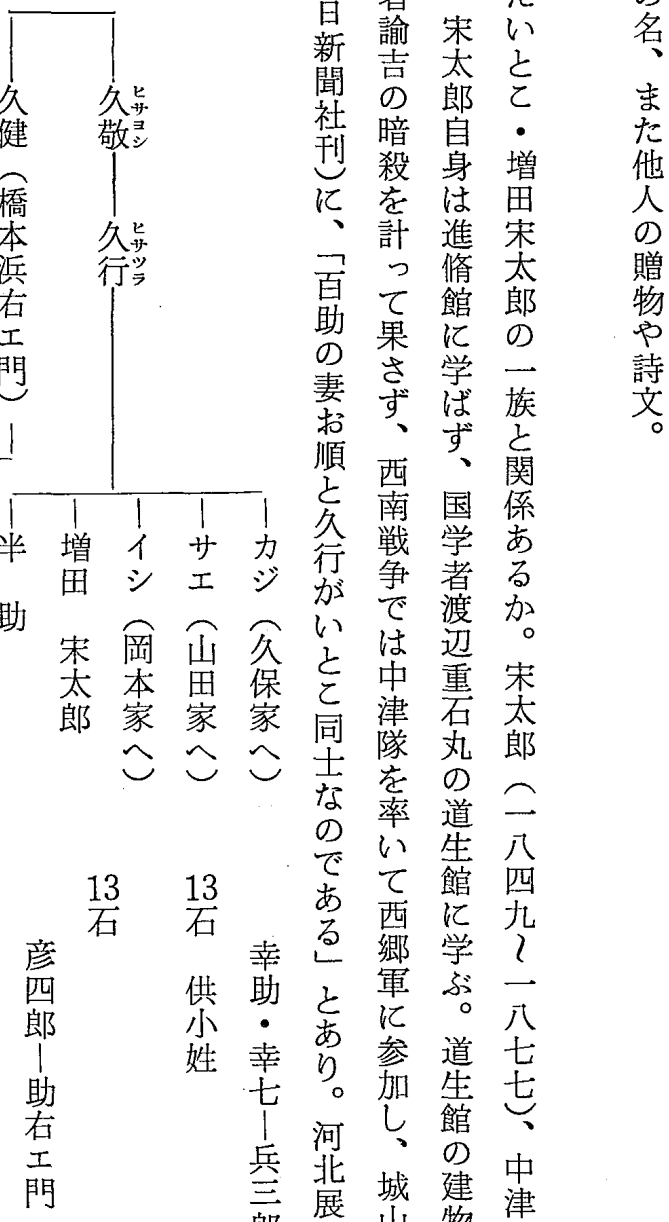
江南　長江下流地方。明清時代を通じて経済文化の一大中心地であり、進士合格者の七・八割はこの地域の出身者が占めた。

花魁　梅の異称。百花の魁（さきがけ）の意味。

瓊瑤　美しい玉の名、また他人の贈物や詩文。

福沢一族交遊関係

増田生：諭吉のまたいとこ・増田宋太郎の一族と関係あるか。宋太郎（一八四九～一八七七）、中津藩一五石二人扶持の増田久行の子。宋太郎自身は進脩館に学ばず、国学者渡辺重石丸の道生館に学ぶ。道生館の建物は中津に現存。宋太郎かって洋学者諭吉の暗殺を計って果さず、西南戦争では中津隊を率いて西郷軍に参加し、城山に死す。松下竜一『疾風の人』（朝日新聞社刊）に、「百助の妻お順と久行がいとこ同士なのである」とあり。河北展生氏いう、



（作品）　至日、寄懐進脩館諸君

至日（しじつ）、懐を進脩館の諸君に寄す

再値蘆灰節序更　　再び芦灰節序（ろかいせつじょ）の更に値（あた）り

天涯苦憶旧詩盟　　天涯苦（しきり）に憶う旧詩盟

何如宮線添長日　何ぞ宮線に長日を添うるに如かん
夢短還難到扇城　夢短くして還た扇城に到るは難し

語釈　至日　冬至の日（太陽暦では十二月二十二日ごろ）

先王以二至日一閉レ関。（『易経』）

蘆灰　あしの灰。

節序　季節の移り変る次第。

宮線　宮殿の線。王十朋詩、観台雲物端可書、

宮線初長日南至（『佩文韻府』）また線と扇は共に去声十七霰韻。

短評　中津にあった日々には、進脩館関係者出身者の間で詩会が持たれており、その詩盟・すなわち詩作者の集りを追想するとともに故郷は遠く「夢短還難到扇城」の嘆きはいよいよ深い。扇城は中津城の異称。桑名城にも用いる。

（作品46）　除夜作

除夜の作

不識東君在比隣　識らず東君の比隣に在るを
喧嘩争走市頭人　喧嘩して争い走るは市頭の人
請見梅柳都無事　請う見よ、梅柳の都て無事なるを
未到暁鐘先入春　未だ暁鐘の到らざるに先づ春に入る

東君　前出。

語釈　喧嘩　さわがしいこと。諠譁と同じ。欧陽脩の「醉翁亭記」に、起坐而諠譁者、衆賓歓也。とあり。

市頭　市中の店さき。

短評　大坂の大晦日の夜の光景を活写する。この日すでに公務からは解放されているのであろう。街角で見る梅も柳も常に変らず、ここには早くも春が確実にやって来ているのに、往来は借金の取立てのためか殺気だっている。

商都　大坂の喧噪を、覚めた眼で見つめている作。

補説　この大坂では町人の力が強かった。明けて正月になれば、次のような光景があった。

宮本又次『大阪今昔〜町と人〜』（社会思想社昭和三十七年十月）P14「また蔵屋敷の武士である御留守居役は年頭の挨拶に両替屋へ鎗・はさみ箱を持たせた若党仲間をつれて礼にいった。そのあとで両替屋の方から蔵屋敷の方へ回礼にいく習慣であった」

○山片蟠桃『夢の代』「経済」第六に、「近年ダン〳〵天下の金銀多〔ク〕ナリテ、ソノ半ハ大阪ニ有リ。ユヘニ天下コレヲ富饒ノ地トス。東西ノ諸侯ミナ大阪ニ借リテ用ヲ弁ズ。北国・西国中国ノ米穀ミナ大阪ニ集ル。又紅毛・清ヨリ渡リ来ル薬種・砂糖ヲハジメミナ大阪ニ買込テ諸国ヘウリ出スコトナリ。ユヘニ大阪ノ地ニ金銀アツマリテ豪富ノモノ多クナリ、諸侯モ大阪ニテ金銀ヲカルコトトナル。ソノ金銀ヲカヘサヾレバ庶人ハ当衛（大阪町奉行所）ニ訴ヘ、……（岩波『日本思想大系』43）

○筆者は『続漢字に強くなる本』（光文書院　昭和五十六年十月（所収「漢詩名作選」中で、「除夜の作」を紹介した。

文政甲申（文政七年・一八二四・百助三十三歳）

（作品47）　春雨書懐

春雨に懐いを書す

春雲薄暮暗江頭　　春雲薄暮江頭に暗し
夜雨蕭〻喚起愁　　夜雨蕭々として愁いを喚び起す
定識鶯聲朝出谷　　定ずや鶯声の朝に谷を出るを識り

預思柳眼早窺樓　預て柳眼の早くも楼を窺うを思う
離家僅喜孤身健　家を離るるも僅に喜ぶ孤身の健なるを
為客偏驚歳月遒　客と為り偏えに驚く歳月の遒るを
縦使佳人頻一笑　縦使佳人の頻りに一笑するも
錦城何肯佐淹留　錦城何ぞ肯て淹留を佐けん

放翁詩云、戯語佳人頻一笑、
錦城已是六年留。〔原注〕

語釈　放翁　南宋の代表的詩人陸游の号。字は務観。（一一二五～一二一〇）浙江省山陰の出身。時事を詠じた悲憤慷慨の詩と、郷里の田園生活に材を仰いだ閑適の詩がある。『劍南詩稿』八十五巻、『渭南文集』五十巻などがある。

錦城　美しい町、繁華の地。

短評　明の詩人王次回を愛する永井荷風に、短篇小説「雨蕭蕭」がある。王次回は乾隆の沈徳潜が退けた頽廃の色の濃い世紀末的傾向の詩人であるが、百助の踏えるのは江戸期に流行した愛国詩人陸游の詩である。この佳人は遊里の女性であろうか。それだけではあるまい。大都会大坂の持つさまざまな魅力をも意味しよう。しかし百助にとり大坂は藩の俗務推進の場である。有能な蔵役人として期待されながらも、心はまたしても故郷へ飛ぶのである。

補説　作道洋太郎『江戸時代の上方町人』（教育社）にいう。「また森泰博氏の調査によると、鴻池両替店の『算用帳』（寛文十年から明治三年まで）のなかに貸有銀として一度でも記載され、鴻池から大名貸しを受けていた諸藩はつぎの一一〇藩に達している。

……〈九州地方〉（二八藩、うち天領一か所を含む）……中津・佐伯・森・臼杵・杵築・府内・岡・日田（天領）……

このように、融資先の大名数は多数にのぼり、三百諸侯のうち三〇パーセントをこえる大名が鴻池を資金源としてい

たことがわかる。」

（作品48）

勧酒作（對→勸）

酒を勧むるの作

壺中別有天　壺中別に天有り（杏花村落近→壺中別有天）

嚢底豈無銭　嚢底豈に銭無からんや（日數杖頭客→嚢底豈無銭）

共是塵中客　共に是れ塵中の客なるも（固→共）

同為酒裏仙　同じく酒裏の仙と為る（還成→同為）

玉山傾欲倒　玉山傾きて倒れんと欲し

綺席坐催眠　綺席坐りて眠りを催す

論事提吾耳　事を論じて吾が耳に提う

浮君太白前　君に浮す太白の前

語釈

玉山傾欲倒　玉山倒とは容姿のすぐれた人が、酒に酔ったありさま。

提耳　耳に口を近づけていうこと。

浮君　むりやり相手に酒をすすめること。……而進之曰、請浮君（『淮南子』「道応訓」）

太白　大杯の異名。

短評　福沢家は酒豪の家系とみえて、百助には飲酒についての詩が多い。この詩はもっぱら酒を詠う。宴席でも居眠りがち用談に入って耳打をされても、かえってむりやり相手に酒をすすめるのである。蔵役人の俗務に従いながらも志は

ここにはない。忘憂の物も仕事と共存では、忘憂の働きはありえない。

（作品49） 二月二十六日作

二月二十六日の作。

海霧江雲雨気饒　海霧江雲雨気饒（あつ）く
春陰半月少晴朝　春陰半月晴朝少し
天王寺畔桃初發　天王寺畔桃初めて発（ひら）き
仏母山邊雪未消　仏母山辺雪未だ消えず
簾外日高鶯舌渋　簾外日高くして鶯舌渋り
橋頭風起柳眉嬌　橋頭風起りて柳眉嬌たり
南郊近有踏青約　南郊近く踏青の約あり
折簡重投謀友僚　折簡重ねて投じ友僚に謀る

語釈 饒　普通はゆたかとか、おおしと読む。

春陰　花ぐもり。

天王寺　大阪市天王寺区の南部一帯の地五九三年（推古天皇）に聖徳太子の創建した四天王寺があり、地名もこれに由来する。（『世界大百科事典』）当時、天王寺産湯が桃の名所。（作品33）桃谷参照

仏母山　天王寺の地名と対にするために、この仏教的な山名を選んだのであろう。大阪郊外にある。田中君安著『大阪繁昌詩』巻之中に、「頼春水遺稿、玉江橋春望七律二聯曰、侯邸古松濤陣陣、市楼春柳翠重重、雲辺塔影天王寺、海上嵐光仏母峰」とある。

踏青　春の野のそぞろ歩き。また桃の節句の曲水の宴を指す。

折簡　短い手紙。

補説　折簡を重ねて投じた友人や同僚とは、はたして誰々であったか。（作品54）の関子克は、たしかに交遊圏内にあった。大坂住いがながくなるにつれて、その交遊圏もひろがって来たことであろう。本格的な詩文の教養があることは、大商人や諸藩の蔵役人との交渉、漢学者・文人たちとの交際の輪をひろげるのに役立ったことと思われる。

○村田蔵六、三月十日、周防国鋳銭司村に生る。備中足守の緒方洪庵十五歳。

（作品50）　三月二十八日、臨高亭に上り、桜花と牡丹との方に開くを看（み）、依って一絶を賦す。臨高亭は、堂嶋の室谷氏の別荘なり。

怪底園林留得春　　怪しむ底（なに）の園林か留めて春を得しや（占断→留得）
櫻花方共牡丹新　　桜花方に牡丹と共に新らし
沈香亭畔移双種　　沈香亭畔双種を移し（東君若許王公號→沈香亭畔移双種）
妖艶誰先脳（ママ）太真　　妖艶誰か先づ太真を悩まさん（伯仲之間孰即→妖艶誰先脳太）

語釈

怪底　底は何、唐の頃の俗語。杜甫の「奉先劉少府新書山水障歌」の第二句に、怪底江山起煙霧（怪しむ底（なに）の江山か煙霧を起こす）とある。吉川幸次郎『杜甫詩注』第三冊（筑摩）参照。また菅茶山の「冬日雑詩」（六）第三句、隣舎喧嘩縁ニ底事一（隣舎喧嘩底事（なにごと）にか縁（よ）る）

福沢一族交遊関係

堂島に別荘を営む室谷（むろたに）氏は、大坂の豪商の一人。文人の保護者パトロンとしても名高い。平凡社の『大人名事典』の第5・6巻にいう、「室谷賀世（よしつぐ）（1780～1840）徳川中期の歌人。字は師古また子毅、家世々大阪堂島に諸侯の用達を

以て業としその八世である。人と為り温厚長者の風あり。繁劇なる業務の傍ら漢学を高宮環中に、和学を富士谷成章及び御杖に就きて受け、…その妹六人部是香の配となり、子賀弘・賀親また能く業を嗣ぐ。著に百人一首富士の高根、……臨高閣十景等がある。」この臨高閣が（作品50）の引の臨高亭である。

（作品51） 同前賞牡丹席上作

前に同じく牡丹を賞する席上の作。

仙衣頻被惠風催　仙衣頻（しきり）に惠風に催（うなが）さる
白〻紅〻巧翦裁　白々紅々翦裁巧みなり
知道花神能解語　知（し）道ぬ花神の能く語を解するを
枝〻恰是五分開　枝々恰（あたかもよ）是し五分に開く

春風欄外夕陽催　春風欄外に夕陽催す
撲鼻清香入酒杯　鼻を撲ちて清香酒杯に入りぬ
國色二旬今日是　国色二旬今日を是（ぜ）とす
前花未落後花開　前花未だ落ちざるに後花開く

語釈 仙衣　仙人の衣、牡丹の花びらに喩える。

欄外　手すりの外。

國色　荻生徂徠の『滄溟七絶三百首解』下の「過殿卿山房詠牡丹」の國色の注に、「蘭是国香、丹是国色」とある。また石田幹之助『長安の春』P11に牡丹濃艶人心を乱し、一国狂ふが如く金を惜まず、と歌はれたように、当時牡丹を賞することは独り長安のみの風潮ではなかった。杏園の春色も稍〻更けて曲池の賑ひも少しく閑寂に帰る頃

は長安の市民は牡丹の花に憧れて気もそゞろに、都を挙げて花の噂に日を暮らした。」

所引の詩は王叡の「牡丹」の「牡丹妖艶乱人心、一国如狂不惜金」（『全唐詩』巻十九）

二句　牡丹の花どきが二句にわたる。

短評　百助の心は、桜よりはやはり中国の詩文で親しんだ牡丹に向うようである。

（作品52）　甲申四月、與丸岡君仲堅遊于赤門（あるいは川？）

歸路舟中謾作繟勺、不要推敲、記其一二。

甲申四月、丸岡君仲堅と赤門（川？）に遊び、帰路舟中謾（みだ）りに繟勺を作（な）し推敲を要（い）れず、其の一、二を記せり。

夜色蒼茫黛色山仲堅　夜色蒼茫たり黛色の山
歸船燈映碧波間咸　帰船燈は映ず碧波の間
鮮妍長袖為嬌態仲堅　鮮妍たる長袖嬌態を為し
醉裏幾人載月還咸　醉裏幾人か月を載（いただ）いて還らん

一橋過去一橋来咸　一橋過ぎ去りて一橋来り
往〻迎人月色開仲堅　往く往く人を迎えて月色開く
此景此時長如此咸　此の景此の時長（とこし）えに此（か）くの如ければ
人間不羨到蓬萊仲堅　人間羨やまず蓬萊に到れるを

語釈　丸岡忠堅　中津藩大坂蔵屋敷留守居役。後出。

繟勺「繟」字『大漢和辞典』になし、「繟勺」の熟語も『佩文韻府』にはない。藤野岩友氏いう。これは「聯句」の誤りであると。

咸字考：百助の諱の咸は「みな」、そこから百助の百が連想されたか。諱と号・字は意味上の関係がある。また夫婦和合の意。『尚書』「堯典」四罪而天下咸服。（四罪して天下咸服す）『易経』咸彖伝、序卦伝、咸亨、利貞、取女吉。（咸は亨る。貞きに利し。女を取ば吉）すなわち咸応の理を説く。『荀子』大略篇、易之咸見夫婦。夫婦之道、不可不正也。君臣父子之本也。咸感也。以高下下、以男下女、柔上而剛下。（易の咸は夫婦を見わす。夫婦の道は、正さざる可からざるなり。君臣父子の本なればなり。咸は感なり。高きを以て下に下り、男を以て女に下る。柔は上にして剛は下なればなり）

補説　酔裏幾人載月還：

黒羽兵治郎の『近世の大阪』（有斐閣昭和十八年十一月）P66第三章　加賀藩蔵屋敷勤役仕法　三　夜切手制度、の項でいう。「淀屋橋口御門（正門）は毎日明六ツ時を以て開き暮六ツ時を以て之を閉じ、御門番足軽の任務たること勿論であるが、其の鍵は御徒横目の保管にかゝり、半年毎に交代し、又毎日閉門したることを足軽より御用番奉行に報告したものである。此のため門限外に出入する場合には一定の手続を必要とし、公用のためであっても夜中に出入するものは奉行以下総べて門番に夜切手を出すべきことゝ定められていた。」

福沢一族交遊関係

丸岡仲堅　諱は実秀、文化十一年大坂蔵屋敷勤務、天保元年正月帰国。上士。文政二年八月家族呼寄せる。その実弟の正則は中津藩上士猪養家を相続す。また仲堅の令息実堅は文政六年大坂留守居助役を勤め、文政九年帰国。この項、河北展生氏の調査に拠る。

（作品53）　甲申夏、記風謡

甲申の夏、風謡を記す。

百年連理可憐郎　　百年連理可憐の郎

郎去如何天一方　郎は如何でか天の一方に去るや
聞説章臺廣島女　聞説く章台広島の女
生來巧学野鴛鴦　生来巧みに野の鴛鴦を学ぶと

庭花夕為狂風老　庭花夕べには狂風の為めに老い
野草朝含雨露新　野草朝には雨露を含んで新たなり
不恨良人廣嶋去　良人の広嶋に去るを恨まざるも
但愁長袖脳良人　但愁う長袖の良人を悩ますを

語釈　風謡　諷戒のうた。
章台　花柳の街
長袖　わが国にては堂上方・僧侶。ここでは高位高官にある者を指すか、妓女を指すか。

短評　白居易の「長恨歌」を踏える。前述のごとく蔵役人は藩の渉外係、とくに経済に関する外交官であり、豪商その他との接触も多い。郷里に残した妻の立場から、現在当っている仕事の厳しさを花柳の巷の人物をからませて詠ずる。また、閨怨詩のおもむきも併せ有する。

（作品54）　四月二十日、與關子克期不至、書即時。関子克と期するも至らず、即事を書す。

狂風襲屋積雲低　狂風屋を襲いて積雲低く
一霎滂沱不作泥　一霎滂沱として泥を作さず
雨歇雲収人未至　雨歇み雲収まるも人未だ至らず
夕陽斜射紙窓西　夕陽斜めに射す紙窓の西

語釈　霎　小雨

短評　待人来らず、いたずらに時間のみ経過する

いらだちが雲、雨、そして夕陽に見事に純されている。

「期不至」の詩題は初唐の宋之問前後よりはじまる。会うこと頻繁な仲でもかえって会わない場合の情趣を咏ずる傾向を、石川忠久氏が昭和五十七年度日本中国学会発表において指摘している。

福沢一族交遊関係

関子克は（作品56）にも登場する。長沢規矩也監修『漢文学者総覧』（汲古書院）によれば、

「関勝之号は蕉川、通称は準平、素平、字は子克、豊後・日出（ひじ）の出身。安政四年没、享年六十五、帆足万里に師事す。本姓は小山氏、日出藩儒。」

日出は木下氏二万五千石、万里の仕えた藩である。『万里全集』上P19に、子克を帆門高足十人の一人に数う。「帆足万里先生年譜」天保五年甲午の項に、「関蕉川家老職となる。」とあり。百助とは万里塾時代からの学友である。また「万里全集」所収の「帆足万里先生小伝」にいう。「関蕉川、……日出ノ人、本姓ハ赤松氏、年十六慨然トシテ学ニ志シ、帆門ニ学フコト数年、業大ニ進メリ、年二十余、帷ヲ府内ニ下シ、尋テ大阪ニ遊ヒ、関居易斎ニ従学シ、其ノ女ト婚シテ関氏ヲ冒セリ、天保三年給人列ニ登用セラレ、累遷シテ家老トナリ、先生致仕スルニ及ヒ、代リテ藩政ノ主任トナリ、頗ル改革スル所アリ、老後子弟ニ教授シ、安政四年卒ス享年六十五、蕉川身ヲ持スルコト厳正、動作礼ヲ以テシ、暑ニ袒カス、昼ハ寝ネス、苟も言笑セス、子弟小過アルモ挙家罪ヲ謝セシム、士大夫仰キテ儀表ト為セリ、蕉川尤も経義ニ精シ、其ノ著述ハ皆家ニ秘シテ世ニ出サス」すなわち関子克は大阪の儒者関居易斎の女婿となり、当時大阪住いだったと思われる。

（作品55）　賦新婚別、奉呈丸岡君仲堅。

新婚の別れを賦し、丸岡君仲堅に奉呈す。

四月郎家嫁　四月、郎が家に嫁するも
未知托身安　未だ身を托するの安きを知らず
十月郎遠去　十月、郎遠く去るも
未知離別難　未だ離別の難を知らず
郎去無帰日　郎去りて帰日無く
風雨蕙草残　風雨に蕙草残る
蕙草何易老　蕙草何ぞ老い易き
屈指潜永歎　指を屈りて潜かに永歎す
三歳空閨裏　三歳空閨の裏
二冬泣沍寒　二冬沍寒に泣く
誰知牀上涙　誰か知らん牀上の涙
夜夜不曽乾　夜夜曽て乾かず
初知生別苦　初めて知りぬ生別の苦
備嘗愈覚酸　備さに嘗て愈いよ酸たるを覚ゆ
省身放籠鳥　身に省みて籠鳥を放つ
對鏡憐孤鸞　鏡に対いて孤鸞を憐む
蠢々小蟲微　蠢々たる小虫の微すら
雌雄尚合歓　雌雄尚お合歓す

天下皆有偶　天下皆偶有り
仁人哀孤単　仁人孤単を哀む
癡心頻結夢　癡心頻りに夢を結び
夢裏訴衛官　夢裏に衛官に訴う
衛官果有情　衛官果して情有らば
帰郎許相看　郎を帰(かえ)して相看るを許せ

語釈　蕙草　香草の名。

鸞　鳳凰の一種。

沍寒　富田正文氏いう、沍寒は沍寒の誤りなりと。きびしい寒さ。

蠢蠢　虫のうごめくありさま。

単孤　一人、単独。

衛官　ここでは、主君の左右にある要路の官。

短評　当時の教養人なら誰しもただちに杜甫の「新婚別」を想起しながら、この詩を読むであろう。杜詩の結びにいう、仰視百鳥飛、大小必雙翔、人事多錯迕、與君永相望。これは安史の乱に際して、新婚夫婦の生別れを詠じた詩である。百助の「新婚別」は、妻阿順の立場に立って切々とその胸のうちを訴えている。杜詩も同じく女主人公の立場に立って詠まれている。

補説　黒羽兵治郎の「加賀藩蔵屋敷勤役仕法」によれば、「改作奉行は二年詰御用番半年代り、春秋交代、御徒横目は一年詰、毎年春秋交代、春は交代するも入米が大体終了するまでは前任者は帰国せず、従って其の頃は三人の御徒横目が在阪していることになる。簞笥役は二年詰、定役三人の中一人が大阪詰となるものであり、浜役御算用者は一年詰

春交代、併し彼等も御徒横目と同様に、入米が大体終了するまでは前任者は帰国せず、従って其の時分には四人の浜役が在阪していた。先納方御算用者は二年詰、秋交代、会所方足軽は一年詰、秋二人、冬一人の交代である。浜役足軽は一年詰、春交代、彼等も入米が大体終了するまでは在阪したものであるから、其の頃は六人を数える。御門番足軽及び小者は一年詰であって、前者は秋の交代、後者は春の交代であった。」

妻を帯同せず、最長二年で交代が加賀藩の例である。河北展生氏によれば、中津藩は三年詰が原則である。

福沢一族交遊関係　文政七年執筆のこの詩により、百助と阿順との結婚は文政五年四月であり、その十一月（詩では表現上十月）に大坂に単身赴任したことが解る。結婚の時、百助三十一歳、阿順は十九歳である。

○単身赴任が原則の時代に、このような嘆願の詩を提出することの出来た丸岡仲堅と百助の人間的関係は、緊密であったと推測される。

補説　伴忠康「適塾をめぐる人々〜蘭学の流れ〜』（創元社一九七八年二月刊）P162にいう。「橋本宗吉の絲漢堂グループが文政七年に解剖を行なった葭島は、木津川と三軒家川とに囲まれた難波島の北端にある刑場である。……賀川玄悦の直系である賀川南竜（秀哲）は、中天游、斎藤方策等とともに、文政七年（一八二四）六月一八日に、一九歳の女屍を解体したが、その場所も葭島であった。また、適塾生が解剖社を結成して、人体構造の研究をしたのもこの場所である。」

○大阪の学問全般についての概観には、『大阪大学放送講座大阪の学問〜懐徳堂・適塾〜』（大阪大学刊　昭和55年9月）がある。

内容：第一回座談会　近世大坂における学問の特質梅溪昇ほか、第二回懐徳堂の沿革…時野谷勝・日原利国、第三回懐徳堂の歴史的背景…脇田修、第四回懐徳堂と和学…小島吉雄、第五回懐徳堂と大坂町人〜懐徳堂五同志・住友家など〜…宮本又次・作道洋太郎、第六回適塾の沿革…伴忠康、第七回緒方洪庵の医学…藤野恒三郎、第八回適塾の教育

と生活…芝哲夫・藤田実、第九回適塾の人びと〜福沢諭吉・大村益次郎・橋本左内・佐野常民・長与専斎など〜…伴忠康・梅溪昇、第十回適塾の人びと〜高松凌雲の人格と業績…伴忠康、第十一回適塾と大坂町人…宮本又次・作道洋太郎〜…第十二回　日本の近代化と大阪の学問〜舎密局・大阪医学校など〜芝哲夫・松田武、第十三回座談会　大阪大学における学問の源流…時野谷勝ほか。

その福沢諭吉の項でいう、「豊前中津藩の廻米方を勤めていた士族福沢百助の末子として天保5年（一八三四）12月、大坂堂島における同藩蔵屋敷（現在阪大病院西寄り）で生れた。父が軽格のために志を伸ばすことができずに世を去ったことを母から聞き、自ら下級武士の生活のみじめさを見聞きするにつけ、早くより封建体制下の門閥身分制に反感を抱いていた。14、5歳頃、藩儒白石常人について学び、その学才をあらわした。安政元年（一八五四）兄の勧めによって蘭学に志し、長崎に遊び、翌2年3月9日洪庵の門に入った。3年11月内塾生となり学業の進歩著るしくやがて塾頭になった。…」

P138

○適塾の塾頭を勤めた村田蔵六が安政六年（一八五九）十月二十九日に、江戸小塚原において女屍の解体に当っている。その二日前の十月二十七日に吉田松陰の処刑があり、その死骸は小塚原に埋められた。

また百助の師帆足万里も文政七年から二十年後には、幕政改革のための時務策を書くに至る。「帆足万里の『東潜夫論』は、一八四七年（弘化四）の上京数年前に成っていたというが、書中にフランス・イギリス船の琉球来航のことをいっているし、阿片戦争を先年のことと書いているから、ほゞ一八四五年（弘化二）ころの初稿なのであろう。そして一八四八年（嘉永元）京都から帰藩後、改訂して完成した。書名を後漢の王符の『潜夫論』に擬した、というように、これは時務策そして幕藩政治批判の書である。万里がこの書を書いたのは、藩の家老を致仕後、『窮理通』の大労作、『入学新論』の教学書をものしたさらに数年の後、門弟を率いて西崦精舎に隠棲して学を講じ、天下の情勢に思いをひそめていた時期である。少年時よりの儒教・詩文の教養、知名の学者・文人との交友経験、壮年期以後

の独習による蘭学知識・身を以て藩政改革の断行に当った家老職としての体験など、この時期の一流の知識人としての学識経験、政治改革者としての実践体験が、まずもってこの書を成立させた重要な歴史的条件としてあったことを銘記しておかねばならぬ。」（小沢栄一『近代日本史学史の研究幕末編』吉川弘文館昭和41年3月）

○文政期の学問・文化の普及と表面的な政治的安定の陰に、すでに幕末の激動期の予感が各方面に現れはじめているのである。文政七年五月には水戸藩大津浜にイギリス捕鯨船員十二人が上陸し、この時に筆談役を命じられたのは会沢安である。安・号は正志斎が『新論』を著述するのは翌年の三月であり、幕府が異国船打払い令を公布したのはその二月である。『新論』はいうまでもなく、幕末の尊王攘夷運動の理論的支柱となった水戸学の代表的著述である。同書は国体（上・中・下）・形勢・虜情・守禦長計の七篇より構成されている。ちなみに安の父「恭敬は才識すぐれ・大坂蔵方の役人として勤務中、文化元（一八〇四）年に世を去った。」（尾藤正英『新論・迪彝篇』岩波文庫版解説）また乾宏巳の「化政期の政治的動向」（『歴史公論』創刊号所収）によれば、（水戸藩）の「大坂の藩蔵屋敷に関係していたのは屈指の豪商加嶋屋であ」った。

○「一般に化政期は武士も町人も〝太平の御治世〟を享楽しえた最後の時期であったといわれる。たしかに蟠桃は、時勢に鋭い批判を投じはしたものの、なお〝御治世〟を謳歌しえた最後の時機〔文化四年二月二十八日〕に世を去ったものであった。そのことはまた、升屋においてもいいうるところであった。升屋にとっての大打撃、仙台藩との破局は、蟠桃の没後十三年で訪れている。」（有坂隆道「山片蟠桃と『夢の代』」日本思想大系43『富永仲基・山片蟠桃』所収）

（昭和五十七年十月四日）

追記及補正・増注

今回より補正・増注をお寄せくださる先学諸氏の御好意に謝意を表するため、『福翁自伝』を読む会・諸家、補注として御協力いただいた団体名と併記することにした。

○宇野精一氏いう。『杲育堂詩稿』訳注三「(作品28) 其二、鴉来起はどうでせうか、鴉来起ス、鴉来ルとでも読むのでせうか。(作品32) 第七、晴川此の処月明多シ、ではないか？(作品38) 149頁三行目、鶯は誤植か。」

○前野直彬氏いう。「詩の訓読及び翻訳について僕なら別の読方をするという点はあるものの、意味に大きな違いはなさそうなので、いちいち挙げることは省略します。ただ(作品40)の「酒を蔵うる婦」と「舟を泛ぶる人」とは『史記』にある言葉が古い例でしょうが、ここで作者が意識していたのは、蘇東坡の「後赤壁賦」に違いないので、その点を断っておいた方がよいでしょう。」

○清水茂氏(京都大学教授)いう。「いろいろ疑問に思う点がありますが、詩の誤植(草書からだと誤読があるのかもしれません)と思われるものをあげておきます。P129、朝來無事曲肱眠→曲肱。『論語』述而、曲肱而枕之より。P131樹抄→樹杪。偏喜外平免飢渇→外はなにかのまちがい。〃尚平〃又は〃向平〃(後漢書逸民伝中の人)ではないか。P133秩桑→扶桑(扶の草書体近い。草書大字典による)というのがあります。なおP131載芟、(君子)于役は、『詩経』の題名にもなっています。

○内山知也氏いう。(「作品28) 其二の頸聯の林樹風寒鴉來起の〃來起〃は「起き來る」でしょうか？何となく落ち着きませんが。「來り起つ」か。尾聯の朝暾漸掃秩桑上は扶桑の誤記ではないでしょうか。扶桑を掃って上る。(朝日がだんだんと日本の空の上に昇ってくるの意)

○富田正文氏いう。「(作品26)の末句、照眼明は前句の「深々として暗し」と対句にして、「眼を照らして明かなり」と

読みたいと思ひます。「眼明を照らす」はシックリ来ません。（作品28）其二の第七句、秩桑は扶桑の誤記か。扶桑は東海中の神木、日輪これによって天空に昇るといはれていますから「朝暾漸掃扶桑上」とすると詩句の意もスッキリ通ります。（作品33）の第一首の転結は、「さもあらばあれ一路狂風起るも十里の紅雲凝りて流れざらん」（やを削る）と訓読したいように思ひますが如何でせうか。風が吹いてもあの紅い雲は流れることはないだろうの意。（作品34）第二句、〃鈎上〃の鈎は鉤の誤記か。鉤の略体〃鈎〃と〃鈎〃との書きちがいでせう。（作品35）第二首の起句の末尾〃翮〃という字は、私の持っている字書には見当らない文字ですが〃翩〃の誤記か。承句の〃繙〃も見慣れませんが〃繙〃の誤記か。その結句〃秖林〃は祇林（略体ならば祇は祇、禾とネとの書きちがい）の書き誤りと存ぜられます。祇林はお寺のこと。（作品38）第二句、〃鶯〃は〃爲〃の誤植か。（作品39）転句の〃誤食性〃は訓読のようでよいと存じますが、或は、食を誤るの性、とよむかとも思っています。

（作品7）　東上舟中作

雄風千里至　風は追風千里も一里
捩拕破奔濤　櫓舵押せ押せ荒波凌げ
去国九州遠　ふるさと九州見れども見えぬ
披雲八嶋高　見える八嶋は雲より高い
人逢巻綃客　乗り合い同士の気散じ旅は
水出戴山鼇　島の姿を見て品さだめ
極目船窓下　あれは鯨かこちらは亀か
傾杯興益豪　酒がはいればますます愉快

未定訳　供御一笑